

中国における舞踊創作学習の実践的研究

傅 正紅

1. はじめに

1979年より改革開放へと向かい、活発な経済活動によって目覚ましい発展を遂げる中国ではあるが、人々の精神に社会の著しい変化によって未知の世界に向かう不安とひびきが生じ初めた。また、一人っ子政策がとられ、「小王帝」現象が立ち現れてきた。つまり、子ども達が大切に育てられることの反動としてわがままになり、自己中心的な意志が強くなった。そして、急速な経済発展と共に社会への不信感、人への不信感によって、テレビゲーム、インターネットなど機械に閉じこもる状況となっている今日、周囲の人々との繋がりが薄くなったと考えられる。

中国の指導要領では、ダンスの内容に舞踊の基本的動作とステップの総合訓練と民族民間舞踊を取り入れ、学生に対する音楽の理解と表現能力を高めることを目的としています。これらの項目の中に、身体的コミュニケーションを目的としたものは含まれていない。筆者は1998年に中国上海中医薬大学で体育教育を担当することになり、特にダンスを指導する過程において、学生達が自分のイメージを素直に表現出来ないことに気付いた、体は体、感情は感情としているように筆者には感じられたのだ。どんな内容と方法を用いれば、学生達の豊かな内面的思考や感情を引き出し、豊かなダンスによる身体表現の活動を展開できるのかと考えるようになった。

2. 研究の目的：

舞踊課題学習を通して、中国人大学生が開かれた自分を認識し、更には他者の心を理解する能力を向上させることによって、自己実現が可能になるものであるかどうかを検討することを目的とする。

3. 研究の方法：

本研究では、中国人大学生を対象に松本千代栄の提唱する「舞踊課題学習」を6回実施し、学生に求めた毎時間の授業記録を分析し、学生の意識の変容を検討した。

- (1) 対象：上海中医薬大学大学生男女10名
- (2) 期間：2004年10月11日—10月22日（一日置きに6回実験授業）
- (3) 場所：上海中医薬大学・体育館
- (4) 方法：

日本で成果をあげている舞踊課題学習（一時間完結学習）を実施し、学生に毎時間授業記録をとるように求めた。記述をKJ法によって分析を行

い、KJ法の結果と先行研究「身体表現活動における自己理解・他人理解の過程」にある項目を照合して下記の7つ項目を設定し、学生の記述を分類し、個人ごとに考察した。

A身体表現の特質の理解
B自己の内側から捉える（体感）：
B-1 自分一人分の記述・自分中心にした視点
B-2 自分と他者あるいは自分を取り囲む環境についての記述
B-3 他者あるいは自分を取り囲む周囲の環境の中に自分が存在するといった視点での記述
C自己を外側から捉える
D他者を身体的コミュニケーションの中から捉える
E他者の動きを見る中で捉える
F指導者や指導そのものについて
Gその他

4. まとめ：

6回の授業を通して、Aの記述については初回の記述数が多かった。B-1の記述については、一回目の記述では個としての感覚を中心にした記述が多く、4回目から見られなくなった。B-2の記述については、2回目に多く見られる。B-3の記述については、記述は後半に集中している。Cの記述については、前半に多く見られる。Dの記述については、2回、3回、6回の記述が多かった。Eの記述については5回目を除いて各回に平均している。Fの記述については、初回が最も多く、授業の回を重ねるに従い少なくなっている。

学生による記述の分類から、山崎による「自己を捉える視点」が見出され、更にジョーハリの窓で示される「自分自身に関する情報を自分と他者の気付きの面から捉える」ということが明らかとなった。

5. 総括：

13名の参加者から6回の実験授業の中に満遍なく自分自身で踊る、創る、観るという三つに関する記述をみる事ができた。それぞれの記述から：

- ①自己を開くということを希望している
- ②自己理解から他者理解へ
- ③主観から客観へ
- ④相互的コミュニケーションを経験し、伝えることと受け入れることが出来るようになった

以上のような四つの過程を見出すことが出来た。身体表現活動を通して今ある自分自身と見つめ合い、自分の内なるものを外界へ向かって開放することが出来ていることが推測され、中国でも同様な舞踊課題学習というものをを用いることが可能だと推測される。